

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

北海道の僻地教育における総合的な学習の時間を活用した自己肯定感の向上

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-08-02 キーワード (Ja): キーワード (En): Bratori-town, Ainu, culture-study, self-esteem 作成者: 上野, 昌之 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1116

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



北海道の僻地教育における総合的な学習の時間を活用した 自己肯定感の向上

An Improvement of Self-esteem of Ainu Children in Remote Area in Hokkaido
through Comprehensive Learning

上野昌之

UENO, Masayuki

はじめに

北海道は広大な領域が広がっている。都市部は限られ、都市部以外は農村部や山間部が広がり、人口密度も低い。道路網は完備されているものの、広さゆえに公共交通機関も限られており、地域間や地域内の移動は基本的に車で行われている。いわゆる僻地では過疎化や少子化によって、子どもの数が減少し、学校の規模も小さいところが多く見受けられる。統廃合も増加し、複式学級や小中学校が隣接合同しているところもある。北海道では僻地教育の対象地域は多い。近年、児童生徒数が急激に減少している。平成26年度学校基本調査によると、全道の小学校の児童数は2,481,124人で前年度よりも4,358人減少し、中学生も134,328人で1,589人減少している。すでに30年以上年ごとに減少している。こうした僻地教育では、子どもたちに様々な不利益が生じている。子どもの実数が少ないだけに限られた交友関係しか作れない。学校活動や課外活動にも支障が出ている。複式学級では、複数の学年を一人の担任が同時に教える

といった教育上の問題もある。また、統廃合により遠距離通学が強いられ、生活に制約を受ける。地域の連携や保護者のつながりも希薄になり、学校自体がなくなるという事態になれば地域基盤すら失うことになる。

本稿では、僻地教育の中で北海道の日高地方に位置する平取町の事例をあげ、その子どもたちの自己実現の方途を考察することにする。平取町は「アイヌの聖地」といわれる二風谷がある地域で、アイヌ民族の人々が集住している地域でもある。平取町は小さい町ではあるが、小学校5校、中学2校、高校1校があり、教育環境としてはまとまりがある。ここに住む子どもたちが教育機会を保障され、自己の成長に結び付けて行けるか考えてみたい。とくに本論では、アイヌ民族の子どもたちの成長、自己肯定感という問題に焦点を絞り、地域教育のあり方、民族アイデンティティの育成など現状を踏まえながらとらえていくことにする。

1. 平取町の概要

平取町は北海道の中南部日高地方沙流郡に

キーワード：平取町、アイヌ、文化学習、自己肯定感
Key words : Bratori-town, Ainu, cultyur-study, self-esteem

位置し、海から内陸に入り南西-東北に40～50kmにおよぶ総面積743.09km²の農村地域である。町の中心を道内でも有数の一級河川の沙流川が流れる。主要産物は平取トマトと平取和牛で、トマトの生産量は全道一である。平取町の人口は5200人余り（2017年8月）で、ここ40年ほどで人口が半減している典型的過疎地である。札幌からは直通の高速バスで2時間ほど、苫小牧からは高速バスで40分かかる。これらは日に数本しかなく、JR日高線が不通になっている現在、新千歳空港からの公共交通の便も悪く、移動の手段はもっぱら車となる。

平取の由来は、アイヌ語のピラウトゥル（pira utur）、「崖の間」を意味する。このことから分かるように古くからアイヌの人々が生活をしてきた。沙流川が河岸段丘を作り出し、現在はその下の平地に町が作られている。温暖で冬場もさほど厳しい気候とはならず、暮らしやすい土地柄である。

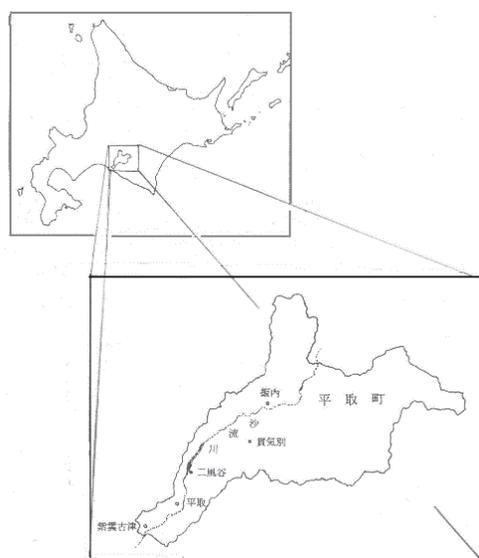


図1. 平取町の位置と学校の所在地

平取町は現在もアイヌの人々が多く暮らす地域である。町全体でアイヌ人口がどれくらいの規模になるかは調査がないので不明であるが、他地域に比べその比重は高い。そのうち、アイヌの人々が集住している地域が二風谷で、平取本町から7キロほど北に行ったところである。ここでは7～8割がアイヌ民族の人だと言われる。

平取町には小学校が5校（紫雲古津・平取・二風谷・貫気別・振内）、中学が2校（平取・振内）、高校が1校（平取）ある。このうち振内地区は本町から遠方に離れているため小中学校が密接な関係にある。あとの小学校4校からは本町にある平取中学に進学する。

2. 平取町の小学校におけるアイヌ学習

平取町の地域教育、郷土学習を考えたとき、アイヌ民族の学習は欠くことのできない学習課題となる。町の広報でもアイヌ文化と伝統、工芸品はあげられており、いわゆる「アイヌの聖地」を強調している。近年はアイヌ文化復興のため地域イオル再生の対象地域にも指定され、平取地域イオル再生事業が進んでいる。アイヌ文化の普及啓発が進み町をあげて観光事業にも関わろうとしている。

アイヌ学習は町内のすべての小中学校で行われているが、ここでは以前からアイヌ学習に取り組んでいる二風谷小学校と比較的アイヌ児童の多い平取小学校の事例を中心にみていくことにする。

(1) 平取町立二風谷小学校の事例

町立二風谷小学校は、1892年二風谷尋常小学校として開校する。開校当初よりアイヌの児童が多く、和人はむしろ少ない学校だった。二風谷地区は川の東に広がる1～2kmの平地

で、後背に低い山が連なる。現在は「アイヌの聖地」とされアイヌ文化博物館、萱野茂アイヌ資料館、沙流川歴史館、アイヌ文化情報センター、旧マンロー邸などの文化施設があり、工芸品を製作販売する店が並ぶ。国道から一歩奥に入ると住宅地が広がっており、小学校まで1 kmほど離れているが、徒歩通学している。児童数は全校で23名（2017年4月）しかおらず、2学年ごとの複式学級で授業が行われている。児童の8割はアイヌ民族出身だとされる。

学校長から以下の説明を受けた。二風谷小学校では1984年から遺跡発掘やいなきび栽培の体験学習が行われていた。これが現在の「ハラキ活動」に発展する。「ハラキ」とはアイヌ語で鶴の舞を意味する。ハラキ活動は1997年に特別活動として始められ、2001年からは総合的な学習の時間の中で行われている。基本的には3年生から6年生までの4年間行うことになる。1・2年生は可能な限り上級学年とともにハラキ活動に参加させている。ハラキ学習は基本的に調査・体験学習で、総合的な学習の時間70時間のうち、30時間の調査活動と10時間の体験活動が行われる。毎年テーマが異なっている。土器づくり、木彫り、アットゥシ織、踊り、イナキビ・シト作りが順繰りに行わる。この他に2015年度後半からアイヌ語学習が年間10時間加わるようになった。講師は地元の専門家が来校し教える。人材は豊富である。近年はアイヌ文化振興・研究推進機構のアイヌアドバイザー派遣制度を利用して派遣してもらうため、学校予算を組まなくても済むようになった。

調査活動は、とくにアイヌ文化に限定されたものではなく、二風谷の自然や風土に根ざしたものなども調べられているが、アイヌ家

庭が多いため自然とアイヌに関する事柄の報告が多くなっている。一例を上げると、「狩り（弓矢の使い方、毒草、弓矢の材料、作製）、アイヌ語劇、二風谷の野生動物、昔の食べ物、薬草、口承文芸、化石、イオマンテ、カムイユカラ、アイヌ文様、木彫り」などバラエティに富んでいる¹⁾。アイヌ文化学習のみに専念しているわけではないが、地域の地名や動植物の名前などはアイヌ語由来のものも多い。自然や生活に関する事柄はアイヌ文化と密接にかかわっており、アイヌ文化を抜きにして地元を語ることはできない環境にある。

2015年の後半から始まったのが、アイヌ語学習（初年は5回）である。学校長の意向により3年生以上を対象に行われるようになった。翌年度から年間10回（月1回）総合的な学習の時間で続けられている。講師は二風谷アイヌ博物館の関根健司氏である。関根氏は平取アイヌ語教室の子ども部の部も手伝っており、小学校の児童たちとは顔なじみである。独自にマオリ民族の民族言語学習法であるテ・アタランギを習得し、それを使ったアイヌ語講習も開いている²⁾。

衣食住をテーマとし2回で1テーマを行うように体系づけることになっている。3年生からの4年間の積み重ねを意識したカリキュラムを想定している。歌やピクチャーカードなどを使いながら、ゲームなど織り交ぜながら簡単なフレーズが語れるように楽しく飽きさせない授業を展開している。この授業はアイヌ語の伝承者を育成するわけではない。学校長は、アイヌ語を学ぶことでアイヌの精神文化を受け継ぎ、誇りをもって生きていくことを学んでもらいたいと考えている³⁾。子どもたちも二風谷小学校でアイヌ語が学べてよかったと感じているようだ。道内の公立学校

でアイヌ語の授業を恒常的カリキュラムとして行うのは、これが初めてのことだろう。北海道にはアイヌ民族がいて、アイヌの子どもたちがいるのだから、公立学校でアイヌ語を学ぶのは自然なことであるが、実現させるには様々な障害がある。最後に学習一般に触れておく。二風谷小学校では児童数が少ないので複式学級で進行しているが、2学年を同時に見るのは教員の負担とはなっている。しかし、少人数制が功を奏し行き届いた学習ができてきているようだ。全国学力・学習状況調査では平均以上をマークしているという。また教員が生活館でおこなっている放課後子ども教室をサポートしており、学習習慣を身につけさせるように指導している。しかし、家庭での学習習慣がなかなか身につかず、家庭との協力関係を作る努力をしているという。

（2）平取町立平取小学校の事例

平取小学校は市街地のある本町に位置する。1880年に簡易科佐瑠太小学校の分校として創立され、4年後平取小学校となる。町の中心部に位置しているため児童数も多く、2017年度は141名で各学年1学級と特別支援学級が3学級設置されている⁴⁾。アイヌ民族の子どもの人数は調査していないので不明だが、地域柄3～4割はいるようである。ただしの帰属意識には揺れがあり、血筋であっても意識

していなかったり、明示しない子も多い。和人人口が3割以上いるので、民族的なグラデーションがある。この点がアイヌ学習する上でも、二風谷小学校のように全面的にアイヌ・アイデンティティを押し出すことができず、積極的なくみができない背景となっている。アイヌ学習を行うことについては20～30年前とは違い反対意見があるわけではなく、積極的に進めてほしいという意見がある反面、地域学習の範囲で行ってほしいとする人々がいるようである。その結果これまでもアイヌ学習は意識の高い教員が赴任していたときに行われていた程度であった。

学校長と教頭によると、2016年度に北海道の「ふるさと教育・観光教育等推進事業」におけるアイヌ文化に関する実践校に指定されたのを受け、アイヌ学習のプログラムが配置され、次の表のような内容で行われるようになった。時間数は3・4年生は10時間程度、5・6年生は5時間程度を割り振っており、体験授業の他に、調べ学習も含んでいる。この他に3・4年生は社会科見学で二風谷アイヌ博物館を参観している。

講師はアイヌ文化振興・研究推進機構のアイヌアドバイザー派遣で在町のアイヌ民族の専門家を招聘し、体験学習の指導をしてもらっている。児童たちはこれまで見聞きしたことはあっても実際に行なった経験はほとんど

表1 平取小学校のアイヌ文化学習

実施学年／実施時期	教科および単元名	内 容
3年／1月下旬	総合的な学習の時間 「アイヌの踊りを踊ろう！」	アイヌの歌と踊り、ムックリ等の体験。
4年／11月下旬	総合的な学習の時間： 「アットゥシ織を体験しよう」	アイヌ文化についての講話。アットゥシ織の体験。
5年／7月上旬	家庭科：「アイヌ料理を作ろう」	アイヌ料理を作り、試食。アイヌの自然観についての学び。
6年／11月中旬	図工：「アイヌの木彫りを体験しよう」	アイヌ文様の意味、木彫り体験。

どなく、積極的に参加している。こうした実習指導の中で講師の講話を聴き、道徳教育的にアイヌの自然観を知ったり、アイヌ民族が経験してきたいじめや差別など、人権教育の部分も触れたりしている。アイヌ理解を促すためには体験的な文化理解を伴うことが効果的に役立っているといえるようである。

これまでのアイヌ学習が単発的だったのは担当教員に依存していたためで、異動などしてしまうと継続性が失われていた。現在では平取町への新任者はアイヌ文化に関する研修を受けることになっており、アイヌ学習を全校の取り組みとすることも可能となってきたと言える。今後町では振内地区以外の小中学校5校でコミュニティスクール構想が進めていくことになる。地元地域との関係性や人材・資源の活用が検討されている。アイヌ学習においても小学校と中学校での系統的な学習ができる仕組みを検討している。

(3) 平取町立平取中学校の事例

平取中学校は1947年に置かれた中学である。人口の集中する平取本町に位置している。生徒数は106人(2017年4月)、各学年30~40人ほどではあるが、生徒数は減少傾向にある。生徒は遠方の振内地区以外の4小学校から進学しており、例年の傾向で、3/4程度が平取小学校の卒業生が占め、そのほか二風谷小学校からは6~7名、貫気別小学校からは5~6人、紫雲古津小学校からは2人程となっている。アイヌ民族であるかどうかは名前や自称から判断すると3~4割、二風谷出身者はほぼアイヌ民族である。和人は2~3割は確実におり、残りは平取小学校と同様に揺れの範疇となる。中学校は広範囲から通学してくるために保護者の職業、民族系統、家庭の

経済状態、家族構成など様々な生徒が通っている。これら様々な要素が学習状況などにも反映してくるため、成績や卒業後の進路なども変化が生じる⁵⁾。2016年度の卒業生は30名であった。全員高校へは進学したが、地元平取高等学校へは9名(男2、女7)しか進学していない⁶⁾。残りは苫小牧や札幌など域外の公立・私立に進学している。地元を選択肢がないため、将来的な展望や部活動の有無、家庭状況などで進路が規定されてくる。

中学でのアイヌ文化学習は小学校ほど盛んではない。学校長によるとカリキュラムが過密で科目ごとに分かれているため時間的な余裕がないことが大きな要因であるという。また、小学校で学習しているので、保護者からの要望なども少なく、生徒からも既習事項だという反応がある。しかし、ふるさと学習ではアイヌ文化学習は北方領土学習と並び重要度が高いという認識はあり、地域の特性から2015年から総合的な学習の時間を使い恒常的な学習を行うようにした。そして、15年度は五里霧中状態であったが、16年度はニュージーランドのマオリ民族の人々が来町したおりに交流イベントを催した。17年度はそれまでの検討されてきた案を実践に移し、1学年ではアイヌ語講座、2学年ではアイヌ文様(切り絵)講座、3学年ではアットゥシのカエカ(糸撚り)の実習講座を行うことになった。期日は8月後半とし、事前学習をしたのち、二風谷から講師を招き実習を2時間行った。その後まとめ・発表の事後活動を行った。体験的な学習となるため生徒の反応はよく、時間の少なさを感じるものだったと説明された。学校長は、アイヌ文化学習を継続するには課題として教員の問題をあげている。アイヌ文化に精通した教員がほとんどおらず、異動の

周期も早いので、学習内容を深めることができないという。そこで、持続的に行っていくために17年度の3種の実習をモデルパターンとすれば継続化させることができるのではないかと考えている。

アイヌ文化学習を中学で行うことは、カリキュラムの現状を考えても時間的に難しいところがある。地域から人材が招聘できても内容の選定を行う教員側に知識不十分なところがあり、深化したものを提示することができないという制約がある。そして何より地域や保護者の間でアイヌ文化を扱うことへの温度差があり、平取中学のある本町地域ではさほど積極的ではない。学校の考え方からすれば、ふるさとにアイヌ文化があるので、様々な生徒はいるが、言葉や踊りなどは最低限学ばせておきたい。興味関心がある生徒は、平取の利点を活かし地域活動で参加していてもらいたいと考えている。

（4）北海道立平取高等学校の事例

平取高校は1951年静内（農業）高校平取分校（夜間定時制）として開校した。1987年に全日制高校となった。平取本町の高台に位置する。2014年より進学コースと教養コースに改編され、地元ニーズに合わせた教育運営を行っている。全校生徒数は64名（2017年4月）である。平取中学からの進学者が6割を超え、残りは振内中学、隣接町の日高中学、富川中学の出身者である。2015年度の卒業生31人中上級学校への進学は15名（大学短大への進学者は8名）、残りが就職等である。全員の進路先は道内で、数名が町内就職である⁷⁾。

平取高校での課題は生徒数の減少である。地元学校長によると生徒の半数以上が町外の高校に進学してしまい、他地域からの進学者

は限られているので入学者の先細りが起きている。上級学校への進学を考えた場合、早めに町外に出てしまう傾向が強く、教育熱心な家庭ほどその傾向にある。生徒数が少ないので部活なども成立せず、それを敬遠し他へ進学してしまう中学生も多い。道の基準からすると現生徒数では存続検討ラインに近く、廃校が懸念されている。町も高校存続のために制服や体操服などの支給や通学交通費の補填など家庭への教育費の補助を行っているが、入学率は伸びていないという。

アイヌの生徒が在籍しているかどうかの調査は行われていない。二風谷地域からの進学者や北海道アイヌ協会への奨学金申請書類請求者数から類推すると10名ほどはいるようである。その他にもいるようなので実数は多少増し、全校の1/4程度かと推定される。

アイヌに関する学習は現在には特に行われていない。2012年までは総合的な学習の時間を使い多少なりとも行っていたそうだが、カリキュラム改編などで時間数確保ができなくなったことを理由に行われなくなっている。教員の異動も影響しているようである。学校長によれば、学校評議会やPTAなどからの地域や保護者の意見ではアイヌに関する学習を積極的に求める声は少ない。道から「ふるさとキャリア教育推進事業」でアイヌに関する学習が求められたが、二風谷以外では産業に結び付かないということで敬遠されていると語る。一方でトマトクラブという部活動では、平取産のトマトを使った料理レシピなどを実践しており、地域イベントで参加のオファーが頻繁にかかるという。この点を考えると二風谷以外の地域ではアイヌに対する思い入れが違うようだ。しかし、生徒が個別に校外でアイヌに関する活動する例は多く、ア

アイヌ文化保存会などでの活動は珍しくない。また昨年から今年にかけても、保険会社の国際交流事業でアイヌ出身であることをPRし外国人との短期交流プログラムに参加したり、ニュージーランドへ短期留学する生徒もいる。学校では全面的にアイヌに関する学習や活動を行うわけではないが、在校生たちは着実にこなっているようで、学校でも個別にフォローアップをしている。全校的にアイヌ民族に関する活動を行わない理由の一つとして、「アイヌ」に対し過敏な生徒が存在していることがあげられている。事後そのケアをしていかなければならないことが懸念されるという。本町辺りでは、アイヌの人々でも二風谷とは異なり様々な人が混在するだけに、アイヌ民族に対するネガティブな感情が未だに潜在的にあることが推察される。

平取高校が今後も存続するためには地域ニーズを満たしていく必要がある。特に進学実績を上げることで地元には選ばれた学校となることが求められている。こうした北海道での僻地教育では、近年のICT機器の導入が活路を開くものとなる。平取高校でも道の遠隔システムを使ったネット授業の配信が実験的に行われている。進学コースでは受験産業のベネッセの自学自習ソフトで反転授業も行わせており、習熟度別クラスを設置も合わせて学力向上に力を注いでいる。その結果も出始めているという。このような取り組みはすでに、全国的には各所で行われており、北海道のような僻地を抱える自治体では教育の機会を保障するために早急に支援普及させていくことが望まれるものである。資格所得に関しても町の補助で札幌での2週間のヘルパー2級講習への参加が無料でできるようになっている。高校生の自己実現に向けた支援が積極

的に行われている。アイヌの子どもたちにとって、アイヌ学習が学校で行われることは求められることではあるが、こうした教育の機会の保障がなされることが、最大の利点ともなる。アイヌ民族の大学進学率は一般の道民に比べればかなり低い。これが経済的理由に起因するのは自明であるが、平取町のように僻地集住することにより、教育情報の不足や高等教育にアクセスするための学力の向上が図れないというハンディキャップが科せられることもある。これがネット社会の進展によりICTの活用により家計の状況で都市部に出られなくとも学習面や情報面で克服ができる可能性が見えてきたわけである。

3. アイヌの子どもアイデンティ形成と自己肯定感

これまで各学校の状況、アイヌ文化学習の現状を見てきた。アイヌ民族の子どもが自文化を学ぶことが、自尊感情を高めることになることはつぶさに見ることができる。家庭やグループで行っている活動が、学校という、ある種の権威をもった機関で扱い、皆が学習するということは、民族文化が社会的に承認されたことでもあるからである。自分や家でそれを受け継いでいけばなおさら、自尊心は高まるだろう。和人の子どもにとって、学校がアイヌ文化を扱うことは、それを学ぶべき価値あるものと評価を与えたことを意味し、これまで意識していなかったものでも、学習することで認知したり、興味関心が生まれたりするのであれば、アイヌ民族についての啓発が成功したということになる。そして、平取の学校で揺れにあたる、アイヌ民族の血筋ではあるが帰属意識の薄いまたは無い子どもたちにとっては、学習経験を積むことでアイ

デンティティ形成を促す効果があると考えられる。思春期に自己の由来や位置づけを強めることができるかは、この年代の発達課題でもある。アイヌ民族の子どもが多いこの地域では小学校の基礎の上に、中学校で発展的にアイヌ学習が加えられることが望まれる。高校以降においてはそれを発展させることが望まれるが、必ずしも学校でアイヌ文化学習を取り組む必要はないのかもしれない。しかし、和人への啓発を含め、アイヌ民族の歴史や人権、先住権などの高次の学習は必要なことではあろう。

アイヌの子どもたちがこうした自文化を身につけることは、自己肯定感を高め、アイデンティティの確立を意味し、自己実現の方途を見出すためにも有益なことである。高校では高等教育や職業の選択という岐路に立たされる。人生の目標を定めるとき、社会で何をすべきかを考えるときに自己との対話が行われる。自己の省察と可能性の意識化の中でアイヌであることが何らかの影響を及ぼす。民族という自覚の芽生えがあれば、それが強く表れることもある。それゆえ、地域学習では民族の本質に触れられるような学習が継続的に行われることが望まれる。またその刺激が新たな自己を生み出す作用となる。

おわりに

今回は平取町での教育をアイヌ民族の子ども視点から考えた。幼少期から自己実現を達成するための種を撒き、育てる教育が意識的、計画的に行われることが教育の役割であろう。青年期にそれをいかに自分のものとして社会に還元していくことができるかを考えその道が、開かれていることが必要なことである。経済的な事由により閉ざされることが

ないようにしなければならない。社会や技術の発展により情報が容易に獲得することができるようになった。これまでの社会的障害が克服できるようになってきた。一人ひとりが意識が変革することで、これを縦横に活用することができ、自己肯定感を高め自己実現に向かうことが期待される。

註

- 1) ゲーマン・ジェフ「地域と文化に根ざした教育について－二風谷小学校の取り組みを中心に－」『九州大学大学院教育学コース院生論文集』第9号2009年 p.76。
- 2) 毎日新聞 教育記事「アイヌ語、授業で 平取・二風谷小」2016年12月16日付。朝日新聞 教育コラム「アイヌ語学、文化に触れる 二風谷小」2017年6月19日付。
- 3) 同上
- 4) 平取町立平取小学校『平成29年度 学校要覧』2017年 p.4。
- 5) 学校長の説明（2017年8月3日）。
- 6) 平取町立平取中学校『平成29年度 学校経営計画』2017年 p.36。
- 7) 北海道平取高等学校『平成28年学校要覧 教育計画』2016年 p.11。

*各学校でのインタビューは2017年8月3・4日に行う。